学びやタイムスリップ

⑮ 宮家別邸の杉戸絵（江戸時代～）

写真1　伝横山清暉「唐獅子図杉戸」（部分）＝江戸時代後期、元日彰小

写真2　山階宮別邸を移築した日彰尋常小学校の講堂（明治中期～後期）

120年間、児童を見守り

明治時代、京都に64の小学校が作られましたが、校舎として使われた建物は各学区によってさまざまでした。1868（明治元）年の京都府布達で、小学校は従来ある建物を利用し、建て増しなどで校舎にするべきだと伝えられており、多くの小学校が学区内の施設を転用して学びやとしていたのです。

その後、児童数の増加により増築の必要が出ても、付近の寺院や殿舎などの一部が譲渡、購入されるなどしたケースも見られます。そのことを今に伝える学校所蔵の美術作品が残っています。

中京区の日彰小（現高倉小）には立派な杉戸絵が所蔵されていました（写真①）。唐獅子と鶴が大きく描かれているもので、幕末の京都画壇を代表する絵師横山清暉（せいき）が手がけたと伝えられています。

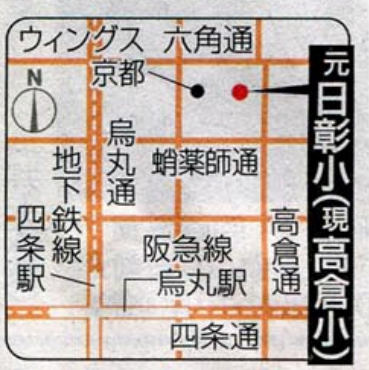
日彰小は1869（明治2）年下京第4番組小学校として三条東洞院に開校しました。庶民教育施設であった京都教諭所の土地と建物、さらに周囲の土地を購入して校舎を建てましたが、3年後には児童数の増加により校舎が狭くなったため、高倉六角和久屋町に拡張移転することとなったのです。

町内にあった元松山藩邸の土地を購入し、西川端荒神口にあった山階宮別邸の建物172坪を移築するなどして新校舎を建てました（写真②）。学校所蔵の杉戸絵はもと宮家の別邸を飾っていたものだったのです。

今残っているのはその一部で、杉戸絵の何枚かは売却されたといいます。唱歌指導のための高価なドイツ製の風琴（オルガン）を購入するためでした。

その後もこの杉戸絵は学校の増改築にともなって、教員室の前に置かれたり、額装されて会議室に飾られたりしながら120年もの間、子どもたちのそばにあり続けました。

（京都市学校歴史博物館　学芸員　森光彦）

◇

今回紹介した「唐獅子図杉戸」は6日から12月3日まで学校歴史博物館（下京区）で展示します。